

# 『大乗二十二問』の本文研究（二）

近宮田中良昭  
藤地清彦

【第十五問】 第十五問云。聲聞縁覺菩薩三乘。於六塵境。各如何見。

第十五に問うて云く、「聲聞・縁  
覺・菩薩の三乗は、六塵の境を各おの  
如何に見るや。」

第十五に質問する、「聲聞・縁覺・  
菩薩の三乗は、六種（色・声・香・味・  
触・法）の対象を各おのどのよう見  
ているのか」と。

謹對。三乗所見。理合不同。然其二  
乗。多分相似。故有聖教。合名下乘。註1  
故見六塵。不分差別。而与菩薩。顯不  
同者。

謹みて對う、「三乗の所見は、理は合  
に同じからざるべし。然るに其の二  
乗は多分に相似す。故に聖教では合し  
て下乗と名づくる有り。故に六塵を見  
るに、差別を分かたず。而して菩薩と  
は顯らかに同じからず。

謹んでお答えします、「三乗の各お  
のの見方については、道理からすれば、  
まさに同じはずはありません。ところ  
が、その聲聞と縁覺の二乗は、多く似  
ています。だから、聖なる教えにおい  
ては（二乗を）合せて下乗（小乗）と名  
付くことがあるのです。それ故に六種  
の対象を見るのに、差別することはな  
いのです。そこが大乗の菩薩とは明ら  
かに違う点です。

仏法理門。總有四種。因縁。<sup>※5</sup> 唯識。<sup>※6</sup> 無相。真如。二乘之人。唯了初一。知一切法。皆從縁。<sup>※6</sup> 生。六塵境界。皆是實有。<sup>※8</sup> 見染見淨。有愛有憎。不了第二唯識門故。未達諸法。皆從心生。執六塵許諸法。<sup>※10</sup> 本性。<sup>※11</sup> 皆空。逐執六塵。實有自性。<sup>※12</sup> 不悟第四真如門故。不信諸法。<sup>※13</sup> 平等皆如。逐執六塵。一一差別。

仏法の理門は、總じて四種あり。因縁・唯識・無相・真如なり。二乘の人には唯だ初めの一のみを了る。<sup>※5</sup> へ一切法は皆な縁より生じ、六塵の境界は皆な是れ実有なり。染を見、淨を見、愛あらざるが故に、未だ諸法は皆な心より生ずるに達せず。<sup>※14</sup> 六塵の境は、心外に実有なり<sup>※15</sup> と執す。第三の無相門に達せざるが故に、諸法の本性は皆な空なるを許さず。<sup>※16</sup> 逐いて六塵は實有・自性なり<sup>※17</sup> と執す。第四の真如門を悟らざるが故に、諸法は平等にして皆な如なるを信ぜず。逐いて六塵は一一差別なり<sup>※18</sup> と執す。

仏法の道理には、全部で四種類あります。それは因縁・唯識・無相・真如です。二乘（声聞・縁覚）の人は、ただその初めの因縁のみを悟つてゐるだけなのです。<sup>※19</sup> あらゆるものはすべて因縁より生まれ、六種の対象はすべて実として存在する。染汚を見、清淨を見、愛があり、憎がある<sup>※20</sup> と理解するのです。また第二の唯識の教えを悟つてないために、未だすべてのものが心より生じていることを理解せず、六種の対象は心の外に實として存在する<sup>※21</sup> ということに執着してしまいます。また第三の無相の教えを悟つていなければ、すべてのものの本質はすべて空であることを認めず、その結果六種の対象は實として存在するものであり、それ 자체の本性が存在する<sup>※22</sup> ということに執着してしまいます。また第四の真如の教えを悟つていなければ、すべてのものは平等であり、みな眞実そのものであるということを信ぜ

菩薩具解。四種理門。悟六塵境。假  
従<sup>\*15</sup>縁起。縁無自性。一切皆空。心生則<sup>\*16</sup>  
生。心滅則<sup>\*17</sup>滅。若離心妄。平等皆如。  
無是無非。無取無捨。宛然而有。宛然  
而空。此是菩薩所見相也。声聞縁覺。  
執相未亡。故与菩薩。所見全別。

菩薩は具さに四種の理門を解し、  
六塵の境は假りに縁に従りて起こり、  
縁は無自性にして、一切は皆な空なり  
と悟る。心の生ずれば則ち生じ、心の  
滅すれば則ち滅す。若し心の妄を離る  
れば、平等にして皆な如なり。是無く  
非無く、取無く捨無く、宛然として有、  
宛然として空なり。此是れ菩薩の所見  
の相なり。声聞・縁覺は、相の未だ亡  
びざるを執す。故に菩薩と所見は全く  
別なり。

ず、その結果、六種の対象は一つ一つ  
差別がある」ということに執着してし  
まうのです。

菩薩は事細かに四種類の道理を理解  
して、六種の対象は仮に縁によりて  
起こり、縁はそれ自体の本性がなく、  
すべては皆な空である」ということを  
悟っています。心が生ずれば則ち生じ、  
心が滅すれば則ち滅するのです。もし  
心が煩惱を離れれば、平等であつてす  
べて真実そのものとなるのです。そこ  
には是・非や取・捨の対立もなく、そ  
のままに有としてあり、そのままに空  
としてあるのです。これこそが菩薩の  
見るところのすがたなのです。しかし  
声聞と縁覺は、そのすがたの未だ滅し  
ないところに執着してしまうのです。  
だから菩薩とは見るところが全く異な  
るのです」と。

【校異】

※この段は、A、B、C、H本の四本の内、C本を底本とする。

※1 B本、H本は「云」を欠く。

※2 H本は破損のため、「下乘故」の三字を欠く。

※3 A本は「見」の下に「有」あり。

※4 A本は「分」を欠く。

※5 H本は破損のため、「縁唯識無相真如」の七字を欠き、「知無相」を作る。

※6 A本は「縁」を「因縁」に作る。

※7 H本は破損のため、「皆是実有」の四字を欠く。

※8 底本は「見染」を欠くも、A本、B本、H本により補う。

※9 H本は破損のため、「諸法皆從心生」の六字を欠く。

※10 H本は破損のため、「本性皆空逐」の五字を欠く。

※11 A本は「皆」を欠く。

※12 A本は「悟」を欠く。

※13 A本は「信」を欠く。

※14 H本は破損のため、「等皆如逐」の四字を欠く。

※15 H本は破損のため、「從緣起緣無」の五字を欠く。

※16 A本は「即」を作る。

※17 A本は「即」を作り、底本は「則滅」を欠くも、B本により補う。

※18 H本は「無是無」の三字を欠く。

【語註】

〔註1〕 下乗・小乗ともい、三乗の中の声聞乗・縁覚乗の一乗のこと。

【第十六問】 第十六問云。菩薩縁覺聲聞三乗。初發心相。行法如何。

第十六に問うて云く、「菩薩・縁覺・聲聞の三乗の、最初の發心のすがたと実践とは、どの様なものか」と。

謹對。夫發心者。皆由因縁。因謂衆生。出世本性。此性即是。諸法真如。由有此性。當得出離。然為無明。所覆障故。<sup>※3</sup>輪轉三界。沈溺死生。受苦無窮。不能出者。皆由不聞。三乘正法。此三乘法。法界所流。故能熏發。真如本性。令其發起。三乘之心。此義云何。謂仏世尊。証真如性。此性即是。出世正因。如其所証。為衆生說。聲發本性。故能發心。故發心因。是真如性。

謹みて對う、「夫れ發心とは、皆な因縁に由る。因とは、衆生の出世の本性を謂う。此の性とは、即ち是れ諸法の真如なり。此の性有るに由りて、当に出離を得べし。然るに無明に覆障せらるるが為の故に、三界に輪轉し、死生に沈溺す。苦を受くること窮り無く、出するこ�能わざるは、皆な三乗の正法を聞かざるに由る。此の三乗の法は、法界に流れる所なり。故に能く真如の本性を熏發し、其れをして三乗の心を發起せしむ。此の義云何となれば、謂く、仏世尊は、真如の性を証す。此の性とは、即ち是れ出世の正因なり。如し其の証する所もて、衆生の為に説か

第十六に質問する、「菩薩・縁覺・聲聞の三乗の、最初の發心のすがたと実践とは、どの様なものか」と。

ば、声は本性より発す。故に能く発心す。故に発心の因とは、是れ真如の性なり。

て、仏性をして三乗の心を発させるのです。それはどの様なことかと言えば、仏・世尊は真実そのものとしての仏性を悟っていますが、この仏性とは、世間を出離する正しい原因なのです。もし（仏・世尊の）悟っているところでもって、衆生の為に説くならば、その衆生に説く声は仏性より発するのです。だからよく発心するのです。それ故に発心の因とは、真実の仏性なのです。

発心縁者。由聞三乗。聞大乗法。發大心者。即名菩薩。聞緣覺法<sup>\*4</sup>。發緣覺心。名緣覺。聞聲聞法。發聲聞心。即名声聞。

発心の縁とは、三乗を聞くに由る。大乗の法を聞いて大心を発す者は、即ち菩薩と名づく。緣覺の法を聞いて緣覺の心を発すを、名づけて緣覺と為す。聲聞の法を聞いて聲聞の心を発すを、即ち聲聞と名づく。

発心の縁とは、三乗の教えを聞くことによるのです。大乗の教えを聞いて、大いなる心を発すものは、菩薩と言います。緣覺の教えを聞いて、緣覺の心を発すものを、緣覺と言います。聲聞の教えを聞いて、聲聞の心を発すものを、聲聞と言います。

今此菩薩發心相者。謂聞大乘。所說正法。說有為法。過患極多。世間諸法。皆可破壞。諸仏功德。最勝無辺。二乘

今、此の菩薩の發心の相とは、大乗の説く所の正法を聞くを謂う。有為の法を説くは、過患極めて多く、世間のことと言います。有為の法を説くのは、

極果。非是究竟。四生五趣<sup>註一</sup>同一真如。  
一切衆生。曾為父母。流浪生死。受苦  
無窮。發心救度。功德無量。行菩薩行。  
能利自他。勇猛修行。速成仏果。由聞  
正法。能起信心。深厭世間。有為過患。  
於仏功德。深起願求。於諸衆生。普欲  
救度。因此能發大菩提心。勇猛修行。  
菩薩妙行<sup>註七</sup>。此是菩薩。發心相也。

諸法は、皆な破壊すべし。諸仏の功德  
は、最勝にして無辺なるも、二乘の極  
果は、是れ究竟に非ず。四生・五趣は  
同一の真如なり。一切衆生は、曾て父  
母の生死に流浪し、苦を受くること窮  
り無きが為に、發心して救度せば、功  
徳は無量なり。菩薩行を行じて、能く  
自他を利し、勇猛にして修行せば、速  
かに仏果を成す。正法を聞くに由りて、  
能く信心を起こし、深く世間の有為の  
過患を厭い、仏の功德に於て、深く願  
求を起し、諸もろの衆生に於て、普く  
救度せんと欲す。此れに因りて能く大  
菩提心を發し、勇猛にして菩薩の妙行  
を修行す。此<sup>註二</sup>是れ菩薩の發心の相な  
り。

過や<sup>とが</sup>患<sup>わざら</sup>いが極めて多く、世間のあらゆ  
るもののがすべて破壊してしまうでしょ  
う。諸もろの仏の功德は、最も勝れた  
ものであり、限りのないものです。声  
聞・縁覚の最上のさとり（阿羅漢果）は、  
究極の境地ではあります。四生（胎  
生・卵生・湿生・化生）も、五趣（色・  
受・想・行・識）も、共に同一の真実の  
ありのままのすがたなのです。一切の  
衆生は、曾て父母が生死に流浪し、苦  
しみを受けることに際限がなかつたの  
に対して、衆生が發心して他を救済す  
るならば、その功德は限りないもので  
す。菩薩の行を行い、よく自らも他を  
も利益し、懸命に修行するならば、速  
やかに仏果（悟り）を完成するのです。  
また正しい教えを聞くことによつて、  
信ずる心を起こすことができ、深く世  
間の有為の過ちや患いを憂い、仏の功  
徳において深く願い求める心を發し、  
一切のものをあまねく救いたいという  
願いを起こすのです。このことによつ

縁覚乗人。発心相者。此由宿世善根所成。於証果時。出無仏世。故発心相。微隱難知。謂於過去。種善根時。遇縁便修。不念果報。所聞正法。便起信心。亦不思惟。勝劣德失。但樂早得。出離涅槃。不樂世間。生死果報。由此成就。解脫善根。善得人身。生無仏世。宿世所種。善根力強。暫遇外縁。成縁覚果。及得果已。不樂度人。常厭喧煩。樂獨善寂。故有經中。名為獨覺。此是縁覚發心之相。

縁覚乗人の発心の相とは、此れ宿世の善根の成する所に由りて、証果の時に於て、無仏の世に出ず。故に発心の相とは、微隱にして知り難し。謂く、過去に於て善根を種うるの時、縁に遇えば便ち修し、果報をおも念わす。正法を聞く所に、便ち信心を起すも、亦た勝劣・徳失を思惟せず。但だ早く出離して涅槃を得んと樂いて、世間の生死の果報を樂わず。此れに由りて、解脫の善根を成就し、善く人身を得て無仏の世に生る。宿世に種えし所の善根の力強ければ、暫くして外縁に遇うて縁覚の果を成す。果を得已るに及ぶも、人を度するを樂わず。常に喧煩けんぱんを厭い、独り善く寂するを樂う。故に「經」中に名づけて獨覺と為す有り。此是れ縁

て、大いなる菩提心を發し、懸命に菩薩の妙なる行を修行するのです。そのすがたこそが菩薩の発心のすがたなのです。

覚の発心の相なり。

す。果を得ることができても、人を救うことと願わざ、常にざわざわとした煩いを嫌い、自分一人で大いに安らぐことを願っているのです。故に「経」の中に独覚と言っているのです。これが縁覚の発心のすがたなのです。

声聞乗人。発心相者。謂曾聞説。<sup>\*9</sup>四諦法門。知苦斷集。証滅修道。知此苦。<sup>\*10</sup>身。因煩惱集。若欲出苦。要斷集因。<sup>\*11</sup>若求斷集。証涅槃樂。修八聖道。<sup>註2</sup>以為正因。聞此法已。深起願求。便能修行。戒定智慧。解脱分善從此得成。由此善根。生於仏世。遇仏聞法。便得涅槃。此即声聞發心相也。

声聞乗人の発心の相とは、謂く、曾て四諦の法門を聞説きて、苦を知り、集を断じ、滅を証し、道を修す。此の苦身は、煩惱の集に因るを知れり。若し苦を出でんと欲せば、要ず集の因を断ずべし。若し集を断じ、涅槃の樂を証せんことを求むれば、八聖道を修して以て正因と為せり。此の法を聞き已りて、深く願求を起こし、便ち能く戒・定・智慧を修行す。解脱の分は、善く此れ従り成ざるを得。此の善根によりて仏の世に生じ、仏に遇いて法を聞き、便ち涅槃を得。此れ即ち声聞の發心の相なり。

根によつて仏の世に生まれ、仏に出遇つて教えを聞き、涅槃を得るのです。これが声聞の発心のすがたなのです。

### 【校異】

※この段は、A、B、C本の三本の内、C本を底本とする。

※1 A本は「菩薩」を欠く。

※2 底本は「性」を欠くも、A、B本により補う。

※3 A本は「故」を欠く。

※4 底本は「法發縁覺」の四字を欠く。

※5 A本は「可」を欠く。

※6 A本は「生」を欠く。

※7 A本は「行」を欠く。

※8 A本は「政」を作る。

※9 底本は「謂曾」より第十七問の「一切苦」までの九六字を欠くので、以下B本を底本とする。

※10 A本は「苦」を欠く。

※11 A本は「永」を作る。

※12 A本は「空」を作る。

### 【語註】

〔註1〕 四生五趣：四生とはあらゆる生きものの生まれを四つに分類したもので、胎生・卵生・湿生・化生の四種をいい、五趣とは地獄・餓鬼・畜生・人・天の五道のこと。

〔註2〕 八聖道：八正道ともいい、釈尊の最初の説法で説かれた、苦の原因としての無明を滅し、理想としての涅槃を実現するための八つの正しい実践のこと。本文中に四諦の説明があるが、その中の道諦の内容を説き示したものとされる。具体的には（1）正見（正しい見解）・（2）正思（正しい思惟）・（3）正語（正しい言葉）・（4）正業（正しい行い）・（5）正命（正しい生活）・（6）正精進（正しい努力）・（7）正念（正しい心の落ち着き）・（8）正定（正しい精神統一）の八つとなる。

【第十七問】 第十七問云。又此三種。皆入涅槃。声聞緣覺菩薩涅槃。各如何者。

謹対。經說三乘。皆同涅槃<sup>〔典1〕</sup>。然其涅槃。應有差別。声聞緣覺。勝劣雖殊。而彼所証。同我空理<sup>〔註1〕</sup>。故二乘者。涅槃不殊。今以二乘。同一位說。

第十七に問うて云く、「又た此の三種は、皆な涅槃に入るに、声聞・緣覺・菩薩の涅槃は、各おのの如何。」

第十七に質問する、「またこの三種、即ち声聞・緣覺・菩薩は、すべて涅槃に入るのに、声聞・緣覺・菩薩の涅槃とは、それぞれどのようなものであるのか」と。

謹みて対う、「經」に「三乗は皆な同じ涅槃なり」と説けり。然るに其の涅槃には、應に差別有るべし。声聞と緣覺とは、勝劣殊ると雖も、而して彼の証する所は、同じく我空の理なり。故に二乗は涅槃を殊にせず。今は二乗の同一の位なるを以て説くなり。

謹んでお答えします、「經」には、「三乗は皆な同じ涅槃である」と説いています。しかしながら、その涅槃には、まさに差別が有るはずです。声聞と緣覚には、勝劣の異なりがあるけれども、しかしながら、二乗の悟るところは、同じく我空の理なのです。だから、二乗は涅槃を異にはしないのです。今は、声聞・緣覺の二乗が同一の位であるということで、以下説くのです。

謂二乘人。於此身上。所得涅槃。名有余依。煩惱雖盡。苦身在故。飢渴寒熱。衆苦極多。深厭此身。欲求棄捨。以滅尽定<sup>註2</sup>。滅其心智。又自化火。焚滅此身。身心都無。如燈炎滅。衆苦俱寂。名無余依。如太虛空。寂無一物。此是二乘。所得涅槃。二乘之人。作如是見。

謂く、二乘の人の、此の身上に於て得る所の涅槃を、有余依と名づく。煩惱は尽くると雖も、苦の身在るが故に、飢渴・寒熱など衆もの苦極めて多し。深く此の身を厭い、棄捨せんと欲求するに、滅尽定を以て、其の心智を滅す。又た自ら火化し、此の身を焚滅す。身・心都て無となるは、燈・炎の滅するが如し。衆もの苦の俱に寂するを、無余依と名づく。太だ虚空の如く、寂して一物も無し。此是れ二乘の得る所の涅槃なり。二乘の人は是の如き見を作す。

菩薩所得。涅槃義者。於此義中。有其二説。一依唯識漸教説者。地前菩薩。未得涅槃。一切苦障。皆未斷故。地上

すなわち、二乘の人の身の上において得るところの涅槃を、「有余依」と名づけるのです。煩惱が尽きたとしても、苦しみの身が在るために、飢えや渴き、寒い熱い等の諸もの苦しみが極めて多いのです。深くこの身を厭いて捨て去ろうとするには、滅尽定をもつてその心智を滅するのです。また自ら火と化して、この身を焼き尽くすのです。身と心のすべてが無くなるのは、ちょうど燈明の炎が消えるようなものです。このように、もろもろの苦しみがすべて滅するのを、「無余依」というのです。大いなる虚空のように、滅して一物もないのです。これこそが声聞・縁覚の得るところの涅槃なのです。声聞・縁覚の人は、このような見方をするのです。

菩薩の得る所の涅槃の義とは、此の義の中に其の二説有り。一に唯識の漸教に依りて説かば、地前の菩薩は未だ

雖得。百法明門<sup>註3</sup>能証二空<sup>註4</sup>。真如妙理。為化衆生。起煩惱故。不得名曰有余涅槃。未捨生死。有微苦故。不得名曰無余涅槃。由有下乘般涅槃障。由是未得。無住涅槃。要至第五地<sup>註3</sup>方斷此障。故至五地。方能証得。無住涅槃。此是菩薩涅槃相也。二乘所得。是有無余。菩薩所得。是無住處。故與二乘。涅槃別也。此依漸教。作此分別。

涅槃を得ず。一切の苦の障、皆な未だ断ぜざるが故なり。地上にて百法明門を得、能く二空・真如の妙理を証すと雖も、衆生を化せんが為めに煩惱を起さないからです。初地より上にて百法明門を得て、二空と真如の妙理を悟つたといつても、衆生を教化するために煩惱を起こしてしまふから、「有余涅槃」ということができないのです。未だに生死を捨てられず、わずかでも苦しみがあるために、「無余涅槃」といふことができないのです。(二乗という)下乗での般涅槃の障げがあるために、未だ「無住涅槃」を得ることができないのです。要するに第五地に至つてこの障げを断ずるのです。だから、五地に至つたならば、まさしく「無住涅槃」を得ることができるので。これこそが菩薩の涅槃のすがたなのです。声聞と縁覚の二乗の得るところは、「有余と無余」であり、菩薩の得るところは「無住處」なのです。だから二乗とは、涅槃は別なのです。これは漸教によつ

以前の菩薩は、未だに涅槃を得ていなければいけないのです。それは、一切の苦しみの障げをすべて未だ断ずることができないからです。初地より上にて百法明門を得て、二空と真如の妙理を悟つたといつても、衆生を教化するために煩惱を起こしてしまふから、「有余涅槃」ということができないのです。未だに生死を捨てられず、わずかでも苦しみがあるために、「無余涅槃」といふことができないのです。(二乗という)下乗での般涅槃の障げがあるために、未だ「無住涅槃」を得ることができないのです。要するに第五地に至つてこの障げを断ずるのです。だから、五地に至つたならば、まさしく「無住涅槃」を得ることができるので。これこそが菩薩の涅槃のすがたなのです。声聞と縁覚の二乗の得るところは、「有余と無余」であり、菩薩の得るところは「無住處」なのです。だから二乗とは、涅槃は別なのです。これは漸教によつ

若依頓教。分別説者。菩薩能了一切皆空。一切萬法。皆從心起。心若不動。<sup>\*4</sup> 一切皆如。能除分別。執著心故。了真實相。不起妄心。即是清淨。涅槃妙理。雖得此理。都無所得。由無所得。無所不得。無所得故。離諸苦障。是無余依。<sup>\*5</sup> 自性無染。功徳成就。是有余依。生死涅槃。俱無所住。是無住處。由無所得。是名自性。清淨涅槃。此是頓教。涅槃相也。是謂三乘涅槃差別。

(二に) 若し頓教に依りて分別して説かば、菩薩は、能く一切は皆な空にして、一切の萬法は皆な心従り起るをして、一切の萬法は皆な心従り起るを了ず。心若し動ぜざれば、一切は皆な如なり。能く分別・執著の心を除くが故に、眞実相を了り、妄心を起さざれば、即ち是れ清淨にして、涅槃の妙理なり。此の理を得ると雖も、都て所得無きなり。所得無きに由りて、得ざる所無し。所得無きなるが故に、諸もろの苦障を離る。是れ無余依なり。得ざる事無きが故に、功徳成就す。是れ有余依なり。生死と涅槃とは、俱に所住無し。是れ無住處なり。所得無きに由りて、自性は染まること無し。是れを自性清淨涅槃と名づく。此<sup>二</sup>は頓教の涅槃の相なり。是れを三乘の涅槃の差別と謂う」と。

て、この分別をしたのです。

二つには、もし頓教によつて分別して説くならば、菩薩は、すべてが皆な空であり、すべてのものは皆な心より起ることを理解できるのです。心がもし動かされなければ、すべては皆なあるがままなのです。分別や執著の心を除くからして、眞実のありようを悟り、妄心を起さなければ、これこそが清淨にして涅槃の妙理なのです。この道理を得たとしても、すべて得るところはないのです。得るところがないからして、得ることのない所はないのです。得るところがないからして、諸もろの苦しみの障いを離れられるのです。これが「無余依」なのです。得ることのないところはないからして、功徳が成就するのです。これが「有余依」なのです。生死と涅槃とは、ともに住まるところがないのです。これが「無住處」なのです。得るところがないから

らして、自らの本性は汚れることがないのです。これを「自性清淨涅槃」というのです。これが頓教の涅槃のすがたなのです。これを三乗の涅槃の差別と言ふのです」と。

### 【校異】

- ※この段は、A、B、C本の三本の内、底本であるC本に脱文があるため、B本を底本とする。
- ※1 C本は冒頭より「ソ一切苦」までを欠くも、底本、A本により補う。
- ※2 底本は「云」を欠くも、A本により補う。
- ※3 A本は「五地」の上一字が不明。
- ※4 C本は「心」を欠くも、底本、A本により補う。
- ※5 底本、A本は「但」に作るも、C本により「俱」に改む。

### 【語註】

〈註1〉 我空理…生空・人空・人無我ともいう。自我を固定的な存在と見ず、本来空であるとする道理。法空に対する語。二乘は人空を説くのみ。

〈註2〉 滅尽定…滅受想定ともい、心と心のはたらきとしての心所のすべてを滅し尽くした禪定のこと。

〈註3〉 百法明門：百法とは唯識で説く五位百法を指し、百法明門とは菩薩が初地において得る法門のことで、百法において明了に通達する智慧のはたらきをいう。この百法明門を説いた論書が『大乗百法明門論』一巻であり、唐の貞觀二三年（六四九）玄奘により訳出されてから法相宗の根本論典の一つとされ、曇曠もこの書の註釈として『大乗百法明門論開宗義記』や『大乗百法明門論開宗義決』を著したことが、敦煌文書によつて知られている。

〔註4〕二空：人空（我空）と法空、すなわち人法二空のこと。人空は〔註1〕参照。法空は法無我ともい、あらゆる存在を仮のもの、すなわち空と見なし、実体視しないことをいう。

〔註5〕第五地：『華嚴經』十地品で説く菩薩の五十二位の階梯の内、第四十一位から第五十位までの十地の第五、すなわち第四十五位の難勝地のこと。そこでは断ち難い無明に勝つとされる。

【第十八問】第十八問云。大乗經中。有說三乘。是方便說。或說究竟。或說二乘。皆得成仏。或說<sup>\*2</sup>一乘。不得成仏。義如何者。

第十八に問うて云く、「大乗經」中に三乗を説く有り。是れ方便の説なり。或いは究竟なりと説く。或いは二乗は皆な成仏を得ると説き、或いは二乗は成仏を得ずと説く。義は如何。」

第十八に質問する、「大乗經」の中には、三乗を説くものがある。これは方便の説である。あるいは究竟であるとも説く。あるいは声聞・縁覚の二乗はすべて成仏できると説き、あるいは二乗は成仏できないと説いている。それはどのようなことなのか」と。

謹對。仏法教旨。深廣無辺。隨所化宣。隱顯異説。顯即究竟。真實理門。隱即方便。隨轉理門。隨轉理門。是不了義。隨小乘宗。義可轉故。真實理門。是真了義。是實大乘。圓極理故。由有二種理門別故。經或說有定性二乘。或經說有不定性二乘。或得成仏。或不成仏。

謹みて對う、「仏法の教旨は深廣にして無辺なり。所化の宜しきに隨いて、隱と顯と異りて説かる。顯は即ち究竟にして、真實の理門なり。隱は即ち方便にして、隨轉の理門なり。隨轉の理門は、是れ不了義なり。小乘の宗に隨いて、義、轉すべきが故に。真實の理門は、是れ真の了義なり。是れは實に大乗の圓極の理なるが故に。二種の理が説明されるからです。真實の理門は

門の別有るに由るが故に、「經」に或いは「定性の二乗有り」と説き、或いは「經」に「不定性の二乗有り」と説く。或いは成仏を得、或いは成仏せずと。

真の了義なのです。これは實に大乗の円極の理であるからです。このように二種の理門の區別があることによるからして、「經」にはあるいは「定性の二乗あり」と説き、あるいは「不定性の二乗あり」と説きます。あるいは成仏できる、あるいは成仏できないと説いているのです。

總說雖然。<sup>※7</sup> 別分別者。略明種姓。有其二門。一就種子。別立五乘。二就眞如。唯立一性。

總じて説かば、然りと雖も、別に分別せば、<sup>ほほ</sup> 略種姓に其の二門有るを明らかに二つの門があることが明らかになります。一つは種子について、別に五乗を立つ。二は眞如に就いて、唯だ一性のみを立つ。

全体的に説くならば、その通りであります、個別に分別するならば、ほぼ種性に二つの門があることが明らかになります。一つは種子については、個別に五乗を立てます。二つには眞如について、ただ仮性のみを立てます。

初約種子。立五性者。無尽意等。諸經所説。<sup>典1</sup> 一切衆生。有五種性。

初めに種子に約して五性を立つとは、「無尽意」等の諸もろの「經」の説く所にして、一切衆生は五種の性有り。

初めに、種子について五性を立てるとは、「無尽意」等の諸もろの「經」の説くところであり、一切の衆生には五種の性があります。

一無種性。謂無三乘。出世種子。由此畢竟。常處凡夫。

二声聞性。謂即本有声聞種子。由此定成声聞菩提。

三緣覺性。謂即本有緣覺種子。由此定成緣覺菩提。

一は声聞性なり。謂く、即ち本より声聞の種子有りて、此れに由りて定んで声聞の菩提を成す。

二は聲聞性なり。謂く、即ち本より聲聞の種子が有つて、これによつて必ず聲聞の菩提を成す。

三つは緣覺性です。それは本来緣覺の種子があつて、これによつて必ず緣覺の悟りを得るのであります。

四つは仮種性です。それは本来成仮の種子があつて、これによつて必ず無上の悟りを得るのであります。

四仮種性。謂即本有成仮種子。由此定得無上菩提。

四は仮種性なり。謂く、即ち本より成仮の種子有りて、此れに由りて定んで無上の菩提を得。

五不定性。謂具三乘無漏種子。由此漸得三乘菩提。

五は不定性なり。謂く、三乘の無漏の種子を具え、此れに由りて、漸に三乘の菩提を得。

五つは不定性です。それは三乘の無漏の種子を具えていて、これによつて段階的に三乘の悟りを得るのであります。

此五種子。非是新生。從本已來。法爾而有。

此の五の種子は、是れ新たに生ずるに非ず。本より已來このかた、法爾として有る

一は無種性なり。謂く、三乘に出世する種子無く、此れに由りて畢竟じて常に凡夫に處る。

二つは声聞性です。それは本来声聞の種子があつて、これによつて必ず声聞の悟りを得るのであります。

なり。

諸經論中。言仏性者。即是第四成仏正因。由有此性。当成仏故。故此種子。名為仏性。不以真如。名為仏性。若以真如。為仏性者。草木瓦石。皆有真如。則草木等。皆應成仏。

諸もろの「經論」中に、仏性と言うは、即ち是れ第四の成仏の正因なり。此の性有るに由りて、當に成仏すべきが故に。故に此の種子を、名づけて仏性と為す。真如を以て名づけて仏性と為さず。若し真如を以て仏性と為さば、草木瓦石、皆な真如有り。則ち草木等は皆な應に成仏すべし。

經說衆生。得成仏者。唯約有此仏種姓人。<sup>\*12</sup>而說一切。皆成仏者。即是一切。有仏種者。非前三類。皆得成仏。

「經」に「衆生は成仏するを得」と説くは、唯だ此の仏種姓有る人のみに約す。而るに「一切は皆な成仏す」と説くは、即ち是の一切とは仏種有る者にして、前の三類の皆な成仏するを得るには非ず。

「經」に「衆生は成仏できる」と説くのは、ただこの仏種性のある人だけについてのものなのです。ところが「すべてが成仏する」と説くのは、そのすべてとは仏種性のある者だけであつて、前の三つの類<sup>たぐい</sup>（すなわち無種性・声聞性・縁覚性の三つ）が、すべて成仏するというわけではありません。

りずっとそのもの自体としてあるものなのです。

經說二乘。不成仏者。說第二三決定性人。定入涅槃。不成仏故。有說二乘。得成仏者。唯約第五不定性人。廻心向大。乃成仏故。

「經」に「二乘は成仏せず」と説くは、第二と三の決定性の人を説くなり。定んで涅槃に入るも、成仏せざるが故に。「二乘は成仏を得」と説くこと有るは、唯だ第五の不定性の人によることのみ。心を廻らして大に向わば、乃ち成仏するが故に。

「經」に「闡提は出世せず」と説くは、但だ第一の無種性人。無三乘因。永沈溺故。衆生既有如是五性。故仏為説五乗法門。

「經」に「闡提は世間を出しができない」と説くのは、ただ第一の無種性の人だけについて言うのです。そして大乗に向うならば、成仏するからです。

経説闡提。不出世者。但約第一無種性人。無三乘因。永沈溺故。衆生既有如是五性。故仏為説五乗法門。

為第一人。説人天法。五戒十善。生人天故。為第二人。説四諦法。令觀染淨。成阿羅漢故。為第三人。説十二因

第一の人の為には、人天の法を説く。五戒・十善もて人天に生ぜんとするが故に。第二の人の為には、四諦の法を

先ず第一の（無種性の）人には、人間界・天上界に生まれるための教えを説きます。五戒と十善によつて人間界・

縁。令觀因縁。成縁覺故。為第四人。說波羅蜜。令修萬行。得成仏故。為第五人。具說三乘。令漸修行。成仏果故。既有如是。定性三乘。故三乗法。是其實理。

説く。染淨を観じて、阿羅漢に成ぜしめんとするが故に。第二の人の為には、十二因縁を説く。因縁を観じて、縁覺を成せしめんとするが故に。第四の人には、波羅蜜を説く。萬行を修めて、成仏を得せしめんとするが故に。第五の人の為には、具さに三乗を説く。漸に行を修めて、仏果を成せしめんとするが故に。既に是の如くの定性の三乗有り。故に三乗の法は、是れ其の実理なり。

而有經中。說一乘者<sup>典<sub>2</sub></sup>。但為引摶不定性人。令捨二乘。向仏果故。就權方便。假說一乘。定性二乘。若成仏者。則一乘法。應是真實。何故深密。及諸經中。說一乘法。是不了義。復約真如。立一

而して「經」中に一乗を説くこと有るは、但だ不定性の人を引摶して、二乗を捨てて仏果に向わしめんが為の故に、就ち方便を權りて假りに一乗を説くなり。定性の二乗は、若し成仏すれば、

天上帝に生まれるからです。第二の（声聞性の）人には、四諦の法を説きます。染汚と清淨とを見きわめて、阿羅漢果を得させるようになります。第三の（縁覺性の）人のためには、十二因縁を説きます。因と縁とを見きわめて、縁覺果を得させるようになります。第四の（仏種性の）人のためには、波羅蜜を説きます。あらゆる行を修めて、成仏を得せしめんとするが故に。第五の（不定性の）人のためには、詳細に三乗を説きます。段階的に行を修めて、最後に仏果を得させようとす

るからです。既にこのような定性の三乗があるのです。だから三乗の教えは、真実の道理なのです。

性者。即涅槃等諸經。皆説一切衆生皆有仏性。<sup>※19</sup><sub>〔典3〕</sub>即是。諸法真如。一切衆生。平等共有。由有此性。皆得成仏。故説衆生。皆唯一性。既諸衆生。皆當得仏。即一切行。皆順真如。是故唯立。一乘正法。

ば、則ち一乗法は應に是れ真実なるべし。何故に『深密』及び諸もろの「經」中には、へ一乗法は是れ不了義なりと説くや。復た真如に約して一性を立つとは、即ち『涅槃』等の諸もろの「經」に、皆なへ一切衆生、皆な仏性有り」と説く、即ち是れなり。諸法の真如は、一切衆生、平等に共有す。此の性有るに由りて、皆な成仏を得。故に「衆生は皆な唯だ一性なるのみ」と説く。既に諸もろの衆生は、皆な当に仏を得べくば、即ち一切の行は、皆な真如に順う。是の故に唯だ一乗の正法を立つのみなり。

くのです。定性の二乗については、もし成仏するならば、その一乗の教えは真実となるはずです。ところが、どうして『解深密經』や諸もろの經典の中には、へ一乗の教えは不了義である」と説くのでしょうか。また真如につづめて仏性を立てるのは、『涅槃經』等の諸もろの經典に、すべてへ一切の衆生には皆な仏性がある」と説いているのが、すなわち是れなのです。あらゆるものに眞如は、すべての衆生が平等に共有しているのです。この性があるからして、皆な成仏することができるのです。だから「衆生は皆な唯だ一性だけなのだ」と説くのです。既に諸もろの衆生は、皆な仏を得ることができるのだから、あらゆる実践は、皆な真如に順うのです。だからただ一乗の正しい教えを立てるだけなのです。

而經所説。五乘性者。但由無明。厚薄不同。出世因縁。有小有大。故有五

ところが、「經」に説かれていくのは、へ五乗の性とは、ただ無明が厚い

乘。種姓差別。無明厚者。未起信心。是阿闍提。名無種性。無明薄者。發出世心。隨聞三乘。成三乘性。故有三乘。決定性人。若於三乘。俱可愛樂。是故名為。不定性人。此五種性。既近熏成。近可令其。得利樂故。故仏隨性。為說三乘。為無性人。説人<sup>\*23</sup><sub>\*24</sub>天法。為三乘人。說三乘法。

ざるに由るのみ」と。出世の因縁には、小あり大あり。故に五乗の種姓に差別あり。無明の厚きものは、未だ信心を起さず。是れ阿闍提にして、無種性と名づく。無明の薄きものは出世心を發し、三乗を聞くに隨いて、三乗の性を成す。故に三乗に決定性の人あり。若し三乗に於て、俱に愛樂すべくば、是の故に名づけて不定性の人と為す。此の五種の性は、既に熏成に近し。近しあり。其れをして利樂を得せしむるべきが故に。故に仏は性に隨いて、為に三乗を説く。無性の人の為には、人天の法を説き、三乗の人の為には、三乗の法を説く。

か薄いか、同じではないことによるだけである」ということです。出世の因縁には、小もあり大もあります。だから五乗の種性には差別があるのです。煩惱の厚い者は、未だに信心を起こしません。これは阿闍提であり、無種性と名づけます。煩惱の薄い者は、出世の心を發し、三乗の教えを聞くに隨つて、三乗の性をなすのです。だから三乗に決定性の人があるのです。もし三乗においてすべてに願い求められるから、その意味で不定性の人というのです。この五種の性は、すでに熏成に近いのです。近いとは、それをして利益を得させることができることからです。だから仏は性に随つて三乗を説くのです。無性の人のためには人天の法を説き、三乗の人のためには三乗の法を説くのです。

然其三乘。有隱有顯。初為別攝。小乘性人。令其証得。小乘果故。是故隱

然るに其の三乘に、隱有り、顯有り。初めに別に小乗性の人を攝して、其れ

覆。為説小乗。不言所説。是小乗法。  
不道別有。無上大乗。

をして小乗の果を証得せしめんが為の故に、是の故に隠覆して、為に小乗を説き、説く所を言わず。是れ小乗の法にして、別に無上の大乗有りと道わず。

人をおさめとつて、彼らをして小乗の果を証らせようとするためであるから、だから(大乗の教えを)隠して小乗の教えを説き、説くところを言わないのです。これが小乗の教えであつて、別に無上の大乗の教えがあるとは言いません。

仏説自身。是阿羅漢。我與汝等。同在一乘。衆生由是<sup>※25</sup>。得成聖果。不知別有。究竟大乘。執我與仏。等無差別。世尊為破。如是執着。及為別攝。大乘性人。令普修行。大乘法故。更為顯説。三乘法門。乃説三乘。是其<sup>典4</sup>實理。言一乘者。是權教門。解深密經<sup>典4</sup>。依此而説。

仏は「自身は是れ阿羅漢なり。我と汝等とは同じ一乗に在り。衆生は是れに由りて聖果<sup>とも</sup>を成するを得るも、別に究竟の大乗有るを知らず。我と仏とは等しくして、差別無しと執す」と説く。世尊は是の如き執着を破さんが為に、及び別に大乗性の人を攝して、普く大乗の法を修行せしめんとするが為の故に、更に為に顯らかに三乗の法門を説けり。乃ち「三乗は是れ其の実理なり。一乗と言うは是れ權教の門なり」と説く。『解深密經』は此れに依りて説けり。

仏は「<sup>わたし</sup>自身は阿羅漢です。私とあなたがたとは同じ一乗にいます。衆生はこれによつて聖なる果(阿羅漢果)を得ることができます。私ができるとしても、別に究極の大乗があることを知りません。私と仏とは等しくして、そこには差別がないと執着してしまいます」と説いています。世尊はこのような執着を取り除くために、更には別に大乗性の人をおさめとつて、あまねく大乗の教えを修行させようとするために、更に顯らかに三乗の法門を説かれたのです。すなわち「三乗はその眞実の道理であり、一乗というのは權教の門である」と説いています。『解深密經』はこれによつ

此就龐淺。近縁門説。有此五性。三乘法門。若就真如。微細正因。一切衆生。皆有仏性。是故究竟。唯有一乘。一切二乘。皆得成仏。決定實無定性二乘。十方仏土中。<sup>※26</sup> 唯有<sup>※27</sup> 一乗法。故知実理。唯一仏乘。法花經等。依此而説。而深密經<sup>〔典6〕</sup> 言。一乗法。不了義者。一乘有二。一者方便。即前所説。合三為一。權說一乘。二者真実。即法花説。會三歸一。實說一乘。深密所言。一乘之清法。不了義者。説前一乘。非説法花。後教一乘。在深密後。説法花故。

此の龐淺<sup>〔そせん〕</sup>・近縁の門に就いて説かば、此の五性・三乗の法門有り。若し真如の微細なる正因に就かば、一切衆生は皆な仏性有り。是の故に究竟せば、唯だ一乗有るのみ。一切の二乗も皆な成仏を得。決定して実には定性の二乗無し。十方の仏土中には、唯だ一乗の法有るのみ。故に知る、実の理にては、唯だ一仏乘のみと。『法花經』等は此に依りて説けり。而るに『深密經』に、「一乗の法は不了義なり」と言うは、一乗に二有り。一は方便なり。即ち前に説く所の、三を合して一と為し、権りに一乗を説けり。二は真実なり。即ち『法花』の説にして、三を会して一に帰し、實に一乗を説くなり。『深密』に言う所の、「一乗の清法は不了義なり」とは、前に説く一乗は、『法花』に説くに非ず。後に教える一乗は、『深密』の後に在りて、『法花』を説く

て説いたのです。

この浅くて近い関係にある教えについて説くなれば、この五性と三乗の教えがあります。もし真実の微にして細なる正しい因に就いたならば、一切の衆生はすべて仏の本性があるので。だから極めつくしたならば、唯だ一乗があるだけです。すべての二乗も、皆な成仏することができるのです。決定して真実には、定性の二乗はないのです。十方の仏土中には、ただ一乗の教えがあるだけです。だから真実の道理では、唯だ一仏乘のみであることが分かるのです。『法華經』などは、この道理によつて説かれているのです。しかしながら『解深密經』に「一乗の教えは不了義である」と言うのは、一乗に二種があるので。一つは方便です。つまり前に述べたところの三つを合つて一とし、権りに一乗と説いたのです。二つは真実です。つまり『法華經』

が故なり。

の説くところであつて、三を会して一に帰し、眞実として一乗を説いているのです。『解深密經』に言うところの一乗の教えは不了義である」とは、前に説いた（方便の）一乗は、『法華經』に説くものではありません。後に教える（眞実の）一乗は、『解深密經』の後にあつて『法華經』を説いたからです。

既知衆生。皆有仏性。一切皆得。成仏菩提。故無一分。無性衆生。尽未來際。不出離者。亦無一類。定性一乘。定入涅槃。不廻心者。如此説者。是小乘教。設有大乘。作此説者。當知皆是隨轉理門。<sup>註2</sup>非是大乘。究竟實理。

既に衆生は皆な仏性有りと知れば、一切は皆な成仏し菩提を得るなり。故に一分も無性の衆生無し。尽未來際に出離せざる者、亦た一類も無し。定性の二乗は、定んで涅槃に入るも、廻心せざる者なり。此の如く説くは、是れ小乘教なり。設し大乗にして此の説を作す者有らば、當に知る、皆な是れ随轉の理門にして、是れ大乗究竟の實理には非ざることを」と。

既に衆生はすべて仏性があることを知れば、すべての人は皆な成仏して菩提を得るのです。だから一分なりとも無仏性の衆生はいないので。未來の果てに至るまで、煩惱の束縛から離れることができない人は、一類もないのです。定性の一乗の者は、必ず（声聞・緣覚の）涅槃の境地に入るけれども、その心を（大乗には）転回しないのです。このように説くのが小乗の教えです。もし大乗でこの説を作す者がいたならば、すべては随轉的道理であつて、こ

これが大乗の究極にして真実なる道理ではないということが分かるのです」と。

### 【校異】

- ※この段は、A、B、C本の三本の内、C本を底本とする。
- ※1 B本は破損の為、「成仏」の二字を欠く。
- ※2 A本は「説」を欠く。
- ※3 A本は「旨」を欠く。
- ※4 A、B本は「姓」に作るも、底本の「性」に全て統一する。
- ※5 B本は「仏成」に作る。
- ※6 底本は「或」を欠くも、A、B本により補う。
- ※7 A、B本は「須」に作る。
- ※8 底本は「性」に作るも、A、B本により「世」に改む。
- ※9 A本は「成」を欠く。
- ※10 底本は「成」に作るも、A、B本により「得」に改む。
- ※11 A本は「五」を欠く。
- ※12 底本は「而」の上に「説」の一字有るも、A、B本により省く。
- ※13 A本は「世」に作る。
- ※14 底本は「而」に作るも、A、B本により「三」に改む。
- ※15 底本は「故」を欠くも、A、B本により補う。
- ※16 ※14と同じ。
- ※17 底本は「令觀因縁成縁」の六字を欠くも、A、B本により補う。

※ 18 底本は「仏」の下に「果」有るも、A、B本により省く。

※ 19 底本は「仏性」の下に「此性」の二字有るも、A、B本により省く。

※ 20 A、B本は「有」に作る。

※ 21 底本は「出世」の下に「不」有るも、A、B本により省く。

※ 22 底本は「三」を作るも、A、B本により「三」に改む。

※ 23 底本は「為」を作るも、A、B本により「説」に改む。

※ 24 底本は「人」を欠くも、A、B本により補う。

※ 25 A本は「是」を欠く。

※ 26 A、B本は「中」を欠く。

※ 27 A、B本は「有」を欠く。

※ 28 底本は「帰」を欠くも、A、B本により補う。

## 【出典】

〔典1〕 『大方等大集經』卷第二十九・無盡意菩薩品第十二之三において「復次施者。安住菩提種子根本……」(大正藏卷一三・二〇四頁上)等、「種子」の語が見受けられるが、「種子に約して五性を立つ」の引用は見受けられない。

〔典2〕 『解深密經』卷一・一切法相品第四か。

「……密意說言唯有名一乘。……」(大正藏卷一六・六九五頁上)

〔典3〕 『大般涅槃經』卷第二十七・師子吼菩薩品第七

：故師子吼。師子吼者名決定說。一切衆生悉有仏性。如來常住無有變易。(大正藏卷一二・五二三頁下)

〔典4〕 『解深密經』が「三乘真実、一乘方便」を説いたことをいつたもの。これに対し『法華經』が「一乘真実、三乘方便」を説いたことは、その直後にある。

〔典5〕 『法華經』方便品第一

仏知彼心行 故為說大乘  
声聞若菩薩 聞我所說法  
乃至於一偈 皆成仏無疑  
十方仏土中 唯有一乘法  
無二亦無三 除仏方便說  
但以仮名字 引導於衆生

說仏智慧故 諸仏出於世 (大正藏卷八・八貢上)

〔典6〕『深密解脫經』卷第二・聖者功德林菩薩問第七

爾時世尊。而說偈言

無法体不生 本寂靜不滅  
自性涅槃法 是故我說常  
三種無体相 第一義無体  
若能知我意 是人得解脱  
一道法進趣 諸衆生解脫  
是故一乘法 隨聞差別說  
諸衆生無量 為身求涅槃  
如來甚希有 安穩諸衆生 (天正藏卷一六・六七三貢中・下)

### 【語註】

〔註1〕 定性・不定性：定性とは、衆生が先天的に具えている、声聞・縁覚・菩薩のいづれかになる素質のこと。不定性とは素質を具えているが、どの仏果になるか定まっていないこと。法相宗はこの説を『楞伽經』『解深密經』に基づいて提唱するが、すべての衆生が成仏すると説く天台宗と論争を起した。

〔註2〕 隨轉理門：唯識説にて仏菩薩の真意を明らかにする眞実理門に対する教えであり、方便説を指す。

【第十九問】 第十九問<sup>\*1</sup>云。經説声聞所得涅槃。与仏無異。後智三身。一切並滅。猶如燈焰。滅即無余。此是定説。是不定説。

第十九に問うて云く、「經」に「声聞の得る所の涅槃は、仏と異なること無し」、「後智、三身の一切並み滅すること、猶お燈焰の滅して、即ち余り無きが如し」と説く。此<sup>こ</sup>是れ定説なりや、是れ定説ならざるや。」

謹對。声聞涅槃。与仏全別。言無異者。是小乘宗。仏為化彼下性衆生。令其証得阿羅漢果。説身極苦。令起厭心。但有心身者。皆是苦惱。故得涅槃。一切皆滅。由此永寂。安樂無為。而我修行。成此滅度。我所得者。汝亦得之。故説三乘。同一解脱。説仏與彼。同一涅槃。後智三身。一切皆滅。如燈焰滅。余尽亦無。依小乘宗。而作此説。拠其實理。或即不然。

第十九に質問する、「經」には「声聞の得るところの涅槃は、仏（の涅槃）と異なることはない」と説いている。また「後得智や三身の仏がすべてみな滅することは、あたかも燈火の炎が滅して、余りが何も無いようなものである」と説いている。これは決定された説なのか、それとも決定された説ではないのか」と。

謹んでお答えします、「声聞の涅槃と仏（の涅槃）とは、全く別のものであります。「異なることはない」というのは、小乗の教えであります。仏はこの世の下品の衆生を教化して、その衆生に阿羅漢の境地を証<sup>さと</sup>らせるために、身体の非常に苦なるを説いて、苦なる身を厭う心を起こさせるのです。ただし、身と心を持っている者は、すべて苦惱があります。だからいつたん涅槃を得た

我が得る所は、汝も亦た之れを得。故に「三乗は同一の解脱なり」と説き、「仏と彼とは同一の涅槃なり」、「後智、三身の一切皆な滅すること、燈焰の滅して余りは尽く亦た無きが如し」と説くは、小乗の宗に依りて此の説を作くなり。其の実理に拠らば、或いは即ち然らず。

涅槃と言うは、是れ円寂の義なり。圓とは圓満にして、三徳の具足するを謂う。寂とは寂靜にして、衆もろの苦の皆な無きを謂う。三身若し無くば、誰か圓寂を説かん。四智既に滅せば、はそうではないのです。

言涅槃者。是円寂義。圓謂圓満。三  
徳具足。寂謂寂靜。衆苦皆無。三身若  
無。說誰圓寂。四智既滅。誰証涅槃。  
故仏涅槃。非是永滅。万徳具足。衆善  
斯円。拠此涅槃。唯仏獨得。故声聞等。

未得涅槃。

誰れか涅槃を証せん。故に仏の涅槃は、是れ永滅するに非ず。万徳具足し、衆善斯に圓かなり。此れに拠りて涅槃は、唯だ仏獨り得るのみ。故に声聞等は、未だ涅槃を得ず。

寂を説くでしようか。四智がすでに滅したならば、誰が涅槃を証するでしょうか。それ故に仏の涅槃は、永遠に滅することがありません。あらゆる徳を具えているから、衆もろの善が圓かなのです。これによつて、涅槃はただ仏獨りが得るだけなのです。だから声聞等は、いまだ涅槃を得ることができないのです。

方便門中説。声聞得涅槃不同。有其二種。一者方便。二者真実。方便涅槃。又有二種。一者外道。二者声聞。外道即以。生無想天。<sup>註3</sup> 生無色界。<sup>註4</sup> 離欲界苦。仮説涅槃。声聞即以。斷龜煩惱。入滅尽定。龜動息滅。名曰涅槃。亦与外道涅槃差別。外道滅度。不離死生。声聞涅槃。乃出三界。雖与外道滅度不同。亦与大乘涅槃有異。<sup>註6</sup>

方便門の中には、「声聞の得る涅槃は同じからず」と説く。其れに二種有り。一は方便、二は真実なり。方便の涅槃にまた二種有り。一は外道、二は声聞なり。外道は即ち無想天に生まれ、無色界に生じて、欲界の苦を離れるを以て、仮に涅槃と説く。声聞は即ち龜の煩惱を断じて滅尽定に入り、龜の動ずること息滅するを以て、名づけて涅槃と曰う。亦た外道の涅槃と差別す。外道の滅度は、死生を離れざるも、声聞の涅槃は、乃ち三界を出ず。外道のことをもつて、涅槃と曰うのです。ま

滅度とは同じからずと雖も、亦た大乗の涅槃とも異なること有り。

(それは) 外道の滅度とは同じではあります。しかし、また大乗の涅槃とも異なることがあります。

大乗所得。究竟無余。真実無為。<sup>註5</sup>常樂我淨。声聞所得。但名有余。未名無余究竟滅度。有三種余。非無余故。言<sup>註6</sup>三余者。一煩惱余。即所知障。二業行余。即無漏業。三果報余。即意生身。

大乗の得る所は、究竟にして無余、真実にして無為、常・樂・我・淨なり。声聞の得る所は、但だ有余と名づけ、未だ無余にして究竟なる滅度とは名づけず。三種の余有りて無余なるに非ざるが故に。三の余と言うは、一は煩惱の余なり、即ち所知障なり。二は業行の余なり、即ち無漏の業なり。三は果報の余なり、即ち意生身なり。

大乗が得るところは、究極的なもので残余がなく、真実にして無為であり、常・樂・我・淨の四つの徳を具えたものです。声聞の得るところは、ただ有余と言い、未だ残余がなく究極的なものである滅度とは言わないのです。それは三種類の残余があつて、残余がないわけではないからです。三種の残余というのは、一つは煩惱の残余です。すなわち知られるべきものに対する、知の働きの妨げなのです。二つは業による行為の残余です。すなわち煩惱の無くなつたものの業なのです。三つは、果報の残余です。すなわち意識より生ずる身なのです。

總說雖然。別分別者。以諸聖凡有二種障。由此能感。二種生死。以煩惱障。從我執起。能發凡夫。五趣漏業。能感凡夫。分段苦身。以所知障。從法執起。<sup>\*9</sup>能發聖人。淨分別業。感得聖人。變易苦身。二乘已能斷煩惱障。滅有漏業。離三界生。能得有余涅槃樂故。厭此麁苦。所依身心。欲入無余。寂滅安樂。以滅盡定。滅其心智。又以化火。焚燒苦身。謂言一切。如燈焰盡。所滅心者。滅六識心。豈能滅得阿賴耶識。所焚身者。焚分段身。豈能焚得。變易身相。非彼知見。不能除故。分段身心。雖然滅已。由所知障。不能滅故。復無漏業。<sup>\*10</sup>亦不捨故。阿賴耶識。<sup>\*11</sup>不可斷故。<sup>\*12</sup>法爾皆有。變易報統。此變易報。名意生身。此身微細。余不能見。欲入滅時。滅六識故。意生身上。六識不行。如重醉人。都無知覺。後滅盡定。勢力盡故。仏悲願力。所資養故。還從定起。如重醉醒。見意生身。在仏淨土。始知不是。無余涅槃。

總じて説かば然りと雖も、別に分別せば、諸もろの聖と凡には二種の障有るを以て、此れに由りて能く二種の生死を感じず。煩惱障は我執より起るを以て、能く凡夫の五趣の漏業を發し、能く凡夫の分段の苦身を感じず。所知障は法執より起るを以て、能く聖人の淨分別の業を發し、聖人の變易の苦身を感じ得す。二乘は已に能く煩惱障を断じ、有漏の業を滅して、三界の生を離る。能く有余の涅槃の樂を得るが故に、此の麁苦の依る所の身心を厭い、無余の寂滅の安樂に入り、滅盡定を以て其の心智を滅せんと欲す。又た化火を以て苦身を焚燒するは、謂わく、へ一切の灯焰の尽くるが如し」と言う。心を滅せらるるとは、六識の心を滅するなり。豈に能く阿賴耶識を滅し得るや。身を焚ぜらるるとは、分段身を焚ずるなり。安樂の境地に入り、滅盡定をもつて心と智慧の働きを滅しようとするのです。また化火三昧に入つて苦しみの肉体を焼き尽くすのは、いわばへすべての灯明の炎が消え失せるようなものでが故に、分段の身心は然く滅し已ると

全体的に説けば、このようでありますが、別べつに分別するならば、諸もろの聖者と凡人には、二種類の障りがあるからして、これによつて二種の生死（の苦）を感じるのです。煩惱障は我執から起るからして、凡夫が五道に生ずるような煩惱による行いをなし、凡夫の分段生死の苦身を受けるのです。所知障は法に対するとらわれより起るからして、聖人の清淨なる分別の行いをなし、聖人の變易生死の身を受けるのです。声聞・縁覚の二乗はすでによく煩惱の障を断じ、煩惱による行いを滅して、三界の生を離れるのです。それは有余の涅槃の樂を得てゐるからして、この麁惡な苦の依りどころとなる身心を厭いて、無余の寂滅の安樂の境地に入り、滅盡定をもつて心と智慧の働きを滅しようとするのです。また化火三昧に入つて苦しみの肉体を焼き尽くすのは、いわばへすべての灯明の炎が消え失せるようなもので

雖も、所知障は滅すること能わざるが故に、復た無漏の業も亦た捨てざるが故に、阿頼耶識も断ずべからざるが故に由りて、法爾として皆な変易の報の続くこと有り。此の変易の報を意生身と名づく。此の身は微細にして、余は見ること能わづ。入滅せんと欲る時、六識を滅するが故に、意生身の上には六識行ぜず。重く醉える人の都て知覚無きが如し。後に滅尽定もて勢力尽くるが故に、仏の悲願力もて資薰せらるるが故に、還<sup>ま</sup>た定より起つるは、重醉の醒<sup>さ</sup>むるが如し。意生身の仏の淨土に在るを見ば、始めて是れ無余の涅槃ならざるを知る。

ある」と言ふことです。心の働きが滅せられるというのは、六識の心を滅すことです。どうして（第八の）阿頼耶識を滅すことができるでしょうか。身を焼かれると、分斷生死の苦身を焼くことです。どうして変易生死の苦身の姿を焼き尽くすことができましまようか。かの（大乗の）知見ではないのだから、除くことはできないからして、分斷生死の苦の身心はそのように滅し已つたとしても、所知障は滅することができないのであり、また無漏の業も捨てないのであり、阿頼耶識も断ち切ることができないのだから、それに由つて、法爾として皆な変易の報いの続くことがあるのです。この変易の報いによつて生じた身を、意生身と名づけるのです。この身は微細であり、他の人には見ることができないのであります。入滅しようとする時には、六識を滅するからして、意生身の上には六識は働きません。ひどく酔つている人がまつた

く知覚がないようなものです。後に滅尽定でもつて身の勢力が尽きてしまうのであり、仏の悲願力でもつて薰習されるのだから、再び禪定から身を起こすのは、ひどい酔いから醒めるようなものです。意生身が仏の淨土にあるのを見たならば、始めてこれが無余涅槃ではないことを知ります。

故楞伽經依此偈云。三昧酒所醉。乃至劫不覺。酒消然後覺。得仏無上身。<sup>典1</sup> 又智度論依此說云。有妙淨土。出過三界。諸阿羅漢。生存其中。<sup>典2</sup> 既聲聞等。求得涅槃。豈更與仏。涅槃無異。故前所言二乘涅槃。與仏同者。是不定言。<sup>20</sup> 執見小乘。妄興此論。達觀君子。詎可從之。

故に『楞伽經』は此の偈に依りて云く、△三昧の酒に酔わざるは、乃ち劫に至るも覺さず。酒消めて然る後に覺し、仏の無上身を得と。又た『智度論』は此の説に依りて云く、△妙なる淨土有りて、三界を出過す。諸もろの阿羅漢は、其の中に生存すと。既に聲聞等は求めて涅槃を得。豈に更に仏の涅槃と異なること無からんや。故に前に言う所の二乘の涅槃の仏と同じとは、是れ定言ならず。見に執する小乘は、妄りに此の論を興すなり。達觀の君子よ、詎ぞ之に従うべけんや

と。

ことは、定説ではないのです。見解に執着する小乗の人は、妄りにこの論を興すのです。既に達観した君子たちよ、どうしてこれに従わねばならないのでしようか」と。

### 【校異】

※ この段は、A、B、C 本の三本の内、B 本を底本とする（C 本は途中で以下欠く為）。

※ 1 底本は「云」を欠くも、A 本、C 本により補う。

※ 2 底本、A 本は「心」を欠くも、C 本により補う。

※ 3 C 本は「皆」に作る。

※ 4 A 本は「有」に作り、C 本は「徳」に作る。

※ 5 底本、A 本は「四」に作るも、C 本により「死」に改む。

※ 6 C 本は「与」に作る。

※ 7 A 本は「無」に作る。

※ 8 C 本は「余」の後に「故言三余者一煩惱余」の九字有り。

※ 9 A 本は「生」に作る。

※ 10 A 本は「者」の後に「焚身者」の三字有り。

※ 11 C 本は「障」に作る。

※ 12 A 本は「識」を欠く。

※ 13 A 本は不詳。

C 本は「六識」の後に「不識」の二字有り。

- ※ 15 C本は「力」を欠く。  
※ 16 A本は「重」を作る。  
※ 17 C本は「有妙淨土出過」までで以下を欠く。  
※ 18 底本は「未」を作るも、A本により「求」に改む。  
※ 19 A本は「三」を作る。  
※ 20 A本は「定」を作る。

### 【出典】

〔典1〕『楞伽阿跋多羅寶經』卷第二・一切仏語心品之二

煩惱智慧等 解脫則遠離  
譬如海浮木 常隨波浪轉  
聲聞愚亦然 相風所飄蕩  
彼起煩惱滅 除習煩惱愚  
味著三昧樂 安住無漏界  
無有究竟趣 亦復不退還  
得諸三昧身 乃至劫不覺  
譬如昏醉人 酒消然後覺  
彼覺法亦然 得仏無上身

（大正藏卷一六・四九七頁下）

〔典2〕『大智度論』が出典と記されているが、未詳。

### 【語註】

〔註1〕 三德：仏の具えている三つの徳で、すべてをあるがまま見通す智徳、煩惱を滅する断徳、衆生救済のための恩徳の三

つを指す。また『涅槃經』には法身德・般若德・解脱德の三つを説いている。

〔註2〕四智：四つの智慧の意。唯識説では次の四つを説く。大円鏡智＝差別なくすべてを映し出す智、平等性智＝すべてのものが平等であることを示す智、妙觀察智＝平等ではあるが、それぞれに特徴があることを示す智、成所作智＝すべてのものを完成させる智。

〔註3〕無想天：すべての心作用を止めた禪の境地。無想有情天とも言う。

〔註4〕無色界：三界の内の一つ。心にある欲望も、外面的・物質的存在も超越し、精神世界のみを重用する生物の住む境界のこと。

〔註5〕無為：原因と条件、すなわち因縁によつて生じたものでなく、不生不滅のままでいる存在のこと。また涅槃のことを指す。

【第二十問】第二十問云。大乘經說。<sup>\*\*1</sup>

一切諸法。皆無自性。無生無滅。本来涅槃<sup>涅槃<sup>無<sup>1</sup></sup></sup>。既爾如何更須修道。一切自然得涅槃故。

第二十に問うて云く、「〔大乗經〕に、一切諸法は皆な無自性にして、生ずること無く滅すること無く、本来涅槃なり」と説く。既に爾らば、如何が更に道を修すべきや。一切は自然に涅槃を得るが故なる」と。

第二十に質問する、「〔大乗經〕にすべての存在は、みな自性が無く、生ずることも無く滅することも無く、本より涅槃そのものなのである」と説いている。既にそのようであるならば、どうしてさらに道を修めなければならないのか、すべてはそのままで涅槃を得ることができるというのに」と。

謹對。仏説法空。為除有執。有執除已。空法亦除。若更執空。却成重過。如藥治病。病息藥亡。既於藥病。皆不

謹みて対う、「仏は法の空なるを説く。有への執を除かんが為に。有への執を除き已らば、空なる法も亦た除か

合留。故於有空。並不可著。

る。若し更に空に執わるれば、却て重き過とがと成る。薬の病を治すも、病息やまば藥亡やむるが如し。既に藥と病に於て、皆な留るべからず。故に有と空に於ても、並て著すべからず。

るからです。存在への執われを取り除き已とりわれば、すべての存在が空であるというおしえもまた取り除かれるのです。もしさらに空に執われたならば、却つて重い過とがとなるのです。薬は病を治すけれども、病が治つてしまえば薬はいらないようなものです。薬と病において執われてはならないのです。だから有と空においても、すべて執着してはならないのです。

故深密經。依此義云。勝義生菩薩白仏言。世尊。世尊初説一切諸法。生相滅相。未生命生。生已相続。增長広大。世尊復説。一切諸法。皆無自性。無生無滅。本来寂靜。自性涅槃。未知世尊。是何密意。世尊告言。我初為彼未種善根。令其種故。未滅諸障。令其滅故。未成資糧。令成熟故。故為宣說。生相滅相。未生命生。生已相続。

故に『深密經』は、此の義に依りて云く、（勝義生菩薩、仏に白して言もうさく、（世尊よ、世尊は初めに一切諸法の生相と滅相、未だ生ぜざれば生ぜしめ、生じ已れば相続して增長広大す、と説けり。世尊は復た一切諸法は皆な無自性にして、生ずること無く滅すること無く、本来寂靜にして、自性涅槃なり、と説けり。未だ知らず、世尊よ、是れ何の密意なるかをと。世尊、告げて言く、（我れ初めに彼の未だ善根を種

だから『解深密經』には、この教義によつて次のように説いています、（勝義生菩薩が仏に白しあげました、（世尊よ、あなた世尊は初めにすべての存在の生相と滅相について、未だ生じていないものは生じさせ、生じ已わつたならば、相続して拡大し発展していくと説かれました。世尊はまた、すべての存在は、皆な自性が無く、生ずることも無く滅することも無く、本より寂靜にして、涅槃そのものであると説かれ

えざるもののに為に、其れをして種えしめんが故に、未だ諸障を滅せざるものに其れをして滅せしめんが故に、未だ資糧を成さざるものに成熟せしめんが故に、故に為に生相と滅相を宣説して、未だ生ぜざるは生ぜしめ、生じ已われるは相続せしむ。

若諸衆生。已種善根。已滅諸障。已能成熟。福知資糧。然由未能除其執着。未能証得。安樂涅槃。故我為説。一切諸法。皆無自性。無生無滅。本来寂靜。自性涅槃。

若し諸もろの衆生の、已に善根を種え、已に諸障を滅し、已に能く福智・資糧を成熟せるも、然して未だ其の執着を除くこと能わず、未だ安樂の涅槃を証得すること能わざるに由るが故に、我れ為めに、一切諸法は、皆な無自性にして、生ずること無く滅すること無く、本来寂靜にして、自性涅槃なり、と説けり。

もし諸もろの衆生で、已に善根を種え、諸もろの障りを滅し、福德と智慧、資糧を十分蓄えているのに、未だその執着を離れられず、安樂の涅槃をさどつていない人がいるので、私は敢えてすべての存在は、皆な自性が無く、生ずることも無く滅することも無く、本より寂靜にして、涅槃そのものであると説いたのです。

若諸衆生。已種善根。已滅諸障。已成資糧。是智慧類。非愚癡類。聞我說是。無自性法。便能信受。善解仏意。如理修行。而離執着。証得究竟。安樂涅槃。此無自性。無生滅法。則於彼人。成大利益。

若し諸もろの衆生の、已に善根を種え、已に諸障を滅し、已に資糧を成すれば、是れ智慧の類にして愚癡の類に非ず。我、是れ無自性の法なりと説くを聞きて、便ち能く信受し、善く仏意を解して、理の如く修行して執着を離れ、究竟なる安樂の涅槃を証得す。此の無自性にして、生滅無きの法は、則ち彼の人に於て大いなる利益を成す。

若諸衆生。未種善根。未滅諸障。未成資糧。聞我說是。一切諸法。皆無自性。無生滅法。雖能信受。不能善解。所說意故。而定執着。由執着。起斷滅見。執一切法。實無性等。於諸善法。不肯修行。不種善根。不滅諸障。不能成就。福智資糧。誹謗<sup>※5</sup>一切。有自性法。破滅一切。功德善根。故無自性。甚深妙法。即於彼人。成大哀損。<sup>※6</sup><sub>〔典2〕</sub>

もし諸もろの衆生で、未だ善根を種えず、未だ諸障を滅せず、未だ資糧を成せざれば、我が是れ一切諸法は皆な無自性にして、生滅無きの法なりと説くを聞き、能く信受すると雖も、説く所の意を善く解すること能わざるが故に、定んで執着す。執着に由りて断滅の見を起こし、一切の法の実に無性等と執し、諸もろの善法に於て修行を肯<sup>うが</sup>

えず、未だ諸障を滅せず、未だ資糧を成ることもなく、諸もろの障りを滅することもせず、資糧を蓄えることがなければ、我がすべての存在は、皆な自性が無く、生ずることも無く滅するとも無いという教えであると説くのを聞いて、よく信じて受け取るといつても、説くところの意味をはつきりと理解することができないために、必ず執

わづ、善根を種えず、諸障を滅せず、福と智の資糧を成就すること能わず。一切の有自性の法を誹謗して、一切の功德・善根を破滅す。故に無自性たる甚深の妙法は、即ち彼の人に於ては、大いなる衰損を成す』<sup>レ</sup>と。

着するのです。執着によつて断滅の見を起こし、すべての存在は、実のところ無自性等と執着し、諸もろの善法を修行しようとせず、善根を種えず、諸もろの障りを滅せず、福德や智慧の資糧を蓄えることができず、あらゆる有自性の存在を誹謗して、一切の功德・善根を破滅しているのです。だから無自性の甚だ奥深い妙なる教えは、この類の人にとっては、大いなる損失となるのです』<sup>レ</sup>と。

経文極広。旨散文弘。故於今者。探意而説。至教昭著。自可依憑。如或広明。恐成繁重。

経文は極めて広く、旨は散じ、文は弘し。故に今は、意を探りて説けり。至教を昭著して自ら依憑すべし。如し或は広く明らかむるも、繁重と成らんことを恐る」と。

経文は極めて膨大で、趣旨は入り乱れ、文章は多岐にわたります。だから今は意味を探し求めて説いたのです。その甚深の教旨を明らかにして、ご自身の拠り所としていただきたいのです。私は広く明らかにしようとします。私は広く明らかにしようとしましたが、かえつて繁雑になつたのではないかと恐れます」と。

【校異】

※この段は、A、B本の二本の内、B本を底本とする。

※1 底本は「云」を欠くも、A本により補う。

※2 A本は「得」を作る。

※3 A本、上山本は「滅」を作る。

※4 底本は「由執着故」を作るも、A本により改む。

※5 底本は「謗」を欠くも、A本により補う。

※6 底本は「成大乘衰損」を作るも、A本により改む。

【出典】

〔典1〕 『解深密經』卷二・無自性相品第五

增長廣大。世尊復說一切諸法皆無自性無生無滅本来寂靜自性涅槃。未審世尊。依何密意作如是說。一切諸法皆無自性無生無滅本来寂靜自性涅槃。〔大正藏卷一六・六九三頁下・六九四頁上〕。

〔典2〕 『解深密經』卷二・無自性相品第五

復次勝義生。若諸有情從本已來未種善根。未清淨障。未成熟相續。未多修勝解。未能積集福德智慧二種資糧。我為彼故。依生無自性性宣說諸法。〔大正藏卷一六・六九四頁下〕。

〔第二十一問〕 第二十一問云。其含藏識。與大智慧。雖有清濁。是一是異。義如何者。

第二十一に問うて云く、「其れ含藏識と大智慧とは、清濁有りと雖も、是一なるや是れ異なるや。義は如何。」

第二十一に質問する、「含藏識と大智慧とは、清と濁とがあるけれども、これは同一なのですか、それとも異なっているのですか。その意味はどのようなことですか」と。

謹對。含藏識。是阿賴耶。大智慧者。即如來藏。有大智慧。光明性故。清濁雖異。性相難分。由此言之。非一非異。故密嚴經。依此偈云。如來清淨藏。世<sup>典1</sup>間阿賴耶。如金與指環。展轉無差別。是<sup>典2</sup>金與指環。喻如來藏。與阿賴耶。非一異義。非一異者。如楞伽經云。泥團微塵。非一非異。金莊嚴具。亦復如是。

謹みて對う、「含藏識は是れ阿賴耶なり。大智慧とは即ち如來藏なり。大智慧に光明性有るが故に、清と濁とは異ると雖も、性と相とは分ち難し。此に由りて之を言わば、一にも非ず、異にも非ず。故に『密嚴經』は、此れに依りて偈に云く、  
「如來には清淨藏、世間には阿賴耶なり。金と指環とが展轉して差別なきが如し」と。金と指環とは、如來藏と阿賴耶の一にも異にも非ざるの義に喻う。一にも異にも非ずとは、『楞伽經』に、「泥團と微塵とは、一にも非ず、異にも非ず。金と莊嚴具も、亦復た是の如し」と云うが如し。

謹んでお答えします、「含藏識とは、阿賴耶（識）のことです。大智慧とは、如來藏のことです。大智慧には光明という本性があるので、清と濁とは異つてゐるけれども、本性とすがた形とを分けることは難しいのです。このことによつて言うならば、同一のものでもなく、異なるものでもないのです。だから『密嚴經』では、偈によつて「如來には清淨藏、世間には阿賴耶（識）である。金と指環とが関連しあつて差別がないようなものである」と言つています。金と指環とは、如來藏と阿賴耶（識）とが、同一のものでも異なるたるものでもないことの意味に喻えられます。同一のものでも異なつたものでないというのは、『楞伽經』に、「泥のかたまりと微塵とは、同一のものでなく、異なつたものでもない。金と莊嚴具も、またこのようないふものである」と言つてゐるようなものです。

謂金全体。以成指環。故金与環。不可一異。若金与環是一者。環相滅時。金体應滅。環相若滅。金体不<sup>※3</sup>亡。故金与環。不可言一。金与環相。若是異者。豈離金外。環相得存。非可離環。別求金体。金与環相。非一異成。藏識与智。當知亦爾。

謂く、金の全体<sup>も</sup>以て指環<sup>ゆびわ</sup>を成すなり。  
故に金と環とは、一にも異にもなるべからず。若し金と環とが是れ一ならば、環の相滅する時、金の体も應に滅すべし。環の相若し滅するも、金の体は亡びず。故に金と環とは、一なりと言うべからず。金と環の相、若し是れ異なるならば、豈に金を離るるの外に、環の相、存することを得んや。環を離るるの別に、金の体を求むべきに非ず。金と環の相とは、一にも異にも非ざること成るなり。藏識と智も、當に亦た爾りと知るべし。

如來藏者。即是真心。阿賴耶者。乃

如來藏とは、即ち是れ真心なり。阿

すなわち、金の全体で以て指環を成りたたせているのです。だから金と（指）環とは、同一のものにも異なつたものにもなることができないのです。もし金と（指）環とが同一のものであるならば、（指）環の形がなくなつた時には、金の全体も当然なくなります。（指）環の形がもしなくなつたとしても、金の全体は亡くなりません。だから金と（指）環とは、同一のものとは言えないので。金と（指）環の形が、もし異なつたものであるとするならば、どうして金を離れた外に、（指）環の形が存在することができましょか。（指）環を離れた別に、金の全体を求むべきではないのです。金と（指）環の形とは、同一のものでも異なつたものでもないことが成り立つのです。藏識と智慧も、まさにそのようなものであると知るべきです。

是妄識。真心清淨。即是本源。妄識生滅。乃成流浪。總說雖然。別分別者。謂如來藏本源真心。性雖清淨。常住無為。而亦不守本清性故。受無明熏。動成妄識。隨流生死。而作衆生。雖成衆生。不失本性。故離妄識。還歸本源。若如來藏。守常住性。不作衆生。有常邊過。若如來藏。成衆生時。失其本性。有斷邊過。既如來藏。非斷非常。故與妄識。非一非異。若定一者。妄識滅時。真心應滅。即墮<sup>\*5</sup>斷邊。若定異者。妄識動時。真心不動。即墮常邊。離此二邊故。非一非異。

賴耶とは、乃ち是れ妄識なり。真心の清淨なれば、即ち是れ本源なり。妄識の生滅せば、乃ち流浪と成る。總じて説かば然りと雖も、別に分別せば、謂く、如來藏とは本源は真心なり。性は清淨にして、常に無為に住すと雖も、而も亦た本より清性を守らざるが故に、無明の熏を受けて、動じて妄識となり、生死に隨流して衆生と作る。衆生と成ると雖も、本性を失わず。故に妄識を離れ、本源に還帰す。若し如來藏の常住の性を守り、衆生と作らざれば、常辺の過有り。若し如來藏の衆生と成る時、其の本性を失いて、断辺の過あり。既に如來藏は、斷に非ず常に非ず。故に与に妄識とは、一にも非ず、異にも非ず。若し定んで一とせば、妄識の滅する時は、真心応に滅すべし。即ち断辺に墮つ。若し定んで異とせば、妄識の動する時も、真心は不動なり。即ち常辺に墮<sup>\*6</sup>つ。此の二辺を離るるが故に、一にも非ず異にも非ず。

同一のものでもなく、異なつたものであります。もし確實に同一のものとするならば、妄なる識が滅する時は、真実心も滅するにちがいありません。つまり断辺に墮ちるのです。もし確実に異なるものとするならば、妄なる識が動く時でも、真実心は動かないのです。つまり常辺に墮ちるのです。この二辺を離れるからして、同一のものでもなく異なるものでもないのです。

問うところの拠りどころは、法性宗に依るところであり、答えるところの教義等とは、その教義はいさか同じものではありません。宗旨には相違があるからです。伏して惟んみれば昭鑒あらばご理解たまわらんことを」と。

所問之因。依法性宗。所対之門。依頓教立。与唯識等。義稍不同。宗旨有殊。伏惟昭鑒。

## 【校異】

※この段は、A、B本の二本の内、B本を底本とする。

※1 底本は「云」を欠くも、A本により補う。

※2 A本は「非」の下に「一」あり。

※3 底本は「已」に作るも、A本により「亡」に改む。

※4 A本は「清」を「靜」に作り、「性」を欠く。

※5 A本は「隨」に作る。

## 【出典】

〔典1〕『大乘密嚴經』卷下・阿賴耶即密嚴品第八

仏說如來藏 以為阿賴耶

惡慧不能知 藏即賴耶識

如來清淨藏 世間阿賴耶

加金與指環 展轉無差別

譬如巧金師 以淨好真金

造作指嚴具 欲以莊嚴指（大正藏卷一六・七七六頁上）

〔典2〕『楞伽阿跋多羅寶經』卷第一・一切仏語心品第一之一

大慧。所以者何。是其所依故。依者謂無始妄想薰。緣者謂自心見等識境妄想。大慧。譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復如是。大慧。若泥團微塵異者。非彼所成而實彼成。是故不異（大正藏卷一六・四八三頁上）。

『入楞伽經』卷第二・集一切仏法品第三之一

言依法者。謂無始戲論妄想熏習。言依緣者。謂自心識見境界分別。大慧。譬如泥團微塵非異非不異。金莊嚴具亦復如是。

『大乘二十二問』の本文研究（二）（田中・宮地・近藤）

非異非不異。大慧。若泥團異者非彼所成。而實彼成。是故不異（大正藏卷一六・五二三頁上）。

『大乘入楞伽經』卷第一・集一切仏法品第二之一

所依因者。謂無始戲論虛妄習氣。所緣者。謂自心所見分別境界。大慧。譬如泥團與微塵非異非不異。金與莊嚴具亦如是。大慧。若泥團與微塵異者。應非彼成而實彼成。是故不異（大正藏卷一六・五九三頁中）。

（以下続く）

【後記】

前号で「『大乗二十二問』の本文研究（一）」を発表した際、その「序」の部分に、本研究の経過について述べ、その発表をするのに、二十二問の内、前半の第一問から第十四問までと、後半の第十五問から第二十二問までに分け、二回で完結することを予告しておいた。

しかし、その後の研究の結果、他の部分に比して極端に長い最後の第二十二問については、これを切り離して考察する必要性が生じ、従つて今回は、第二十二問を除く第十五問から第二十一問までの「本文研究」に限定し、第二十二問は次回に回すこととした。

第十五問以下の原案の作成は、現研究生の近藤章正君の手になるものではあるが、全体の統一上、完全原稿にするには、前回同様、現曹洞宗総合研究センター幹事の宮地清彦君の手を煩わせたため、今回と次回は私を含めた三名の名を連ねさせていただくこととした。また研究には、大学院博士後期課程の林鳴宇、程正両君の参加を得た。

以上の点を諒とせられたい。

（田中良昭記す）